みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.106

2022年3月

子どもの生きづらさと今

目次

子どもの風景（第５回） 1

特集　子どもの生きづらさと今

子どもの生きづらさと
学校の今日的課題・背景を見つめる　数見　隆生 2

安心して成長できる居場所を　長岡　美涼 8

私の子ども時代から考える学校　日沢　慶輔 9

顔の見える関係の構築を　伊藤　雄高 10

「不登校」から「進撃の不登校」へ　村松　稔 11

不登校は『自分らしく生きる』生き方の選択　遠藤さち子 12

授業への招待⑤
楽しいほうがいいじゃない　林　由貴 14

教育時評（新年度を迎えて）
じっくりと考えて　山沢　智樹 16

子育て、孫育て奮闘記（最終回）　阿部　真弓 18

おすすめ映画
『ユンヒへ』　長住　康博 19

読書のすすめ（第７回）　久保　健 19

子どもと学校
コロナ禍での喜怒哀楽　芳賀　郁雄 20

わたしの出会った先生 35
心に刻んだ一言　横山　頼義 22

相談センター報告　（第 26 回）
肩の力を抜いて向かい合おう　室賀　徹 23

ひと言
他国を侵略する権利はどこの国にもない　佐藤　春治 24

子どもの風景　作品について　堀籠智加枝 24

センターの動き・編集後記　24

表紙写真：高橋達郎　　題字：江島隆二

子どもの風景 第5回

おいしいあげぱんが

海

朝から楽しみにしていたあげぱん。
今日は、ちかえ先生が出ちょうだ。
おかわりに、先生の分のあげぱんがある。
1・2・3・4時間目も
ずっと楽しみにしていたあげぱん。

そして、給食の時間が来た時、
M先生が来た。
ぼくは、
「なんだと！」
と思った。
M先生に、ちかえ先生のあげぱんが食べられた。
ぼくは、
（ガーン。）
と思った。
そして、こう言った。
「次、先生が出ちょうの時は、先生の給食、ぜったい食べてやる。」

特集 子どもの生きづらさと今

子どもの生きづらさと学校の今日的課題・背景を見つめる

～不登校問題のあゆみを中心に～

宮城教育大学名誉教授　数見隆生

はじめに

コロナ禍が約2年間も続き、子どもたちの生きづらさは、様々な家庭的、学校的課題を背負う状況の中で、ピークを迎えていると感じられます。

まず、家庭生活上では、児童の虐待（児童相談所への訴え件数）は、この30年間増え続け、この20年間で10倍に増え、20年度には20万件を超えました。痛ましい虐待死にまで至るケースが毎年50件を超える状況です（厚労省・令和2年）。学校がらみの児童・生徒の自死もこの20年度には過去最高となり、472人にも及んでいます（厚労省統計をもとに文科省分析）。

また、学校内では、これまでにもあった子ども同士の「いじめ」や「荒れ（暴力）」が相当数あり、「重大事態」に至るケースも増えていますが、とりわけ小学校段階での急増が心配されます。さらには、ここで主に取り上げる不登校問題ですが、この5年ほどの間に急増してきている状況が見られます。90年代に一気に増加した小・中学生の「学校離れ」の現象が、2000年代になって高止まりをしていたのが、ここ数年間で再度急増化し、20万人近くにまで及んでいます。この不登校問題でも、小学生に急増現象が見られるのが特徴です（令和2年度文科省調査・年次推移は4頁のグラフ参照）。

日本の「子ども期の喪失」の実状を、国連子ども権利委員会に報告・提起した「NGO報告書つくる会（堀尾輝久代表）」は、「いじめはプレッシャーの転化、不登校はプレッシャーからの忌避、校内暴力はプレッシャーへの攻撃、自殺はプレッシャーからの自分破壊」と捉え、その現実と要因を訴えています。それを受け、国連の子ども権利委員会は、20年の第4・5回勧告で、日本（政府と一般市民）に対し、「教育としての権利」の項で「あまりにも競争主義的な制度（システム）を含むストレスフルな学校環境から子どもを解放するための措置の強化」を求めました。この「あまりにも」は、第1回目の勧告ではhighly（大いに）でしたが、2回目にはexcessively（非常に）、3回目にはextremely（極めて）、そして今回はoverly（過度に）にと強調を高めました。まさに的を得た報告及び勧告だと思われます。

この小論では、この生きづらさの現象の中でも、不登校・登校拒否の問題に焦点を当て、なぜ「学校に行けないのか・行きづらいのか」その背後にあるプレーシャーやストレスフルな「制度を含む学校環境」とそうさせている背景について、歴史的な変化を踏まえながら問題を探りたいと思います。

1　戦後の登校拒否・不登校の出現と子どもの生きづらさの始まり

私は終戦2か月前に生を受け、小学校に入学したのは51年（昭和26年）で、当時はまだ終戦後の混乱状況が残っていて、親が亡くなったり貧困で学校に来れない子がかなりいました。その状況がほぼなくなるのに10年はかかりました。そうした戦災や病的長期欠席でなく現代的な不登校が出始めたのは60年代になってからでした。この頃に、早や受験競争が始まっていたのです。私の高校受験（61年）にはすでに高校のランキングがありましたし、「4当5落（4時間だと受かるが、5時間寝ると落ちる）」という言い方もされていました。高度経済成長期以降、学習指導要領に拘束力を持たせ、一気に「世界に追いつき追い越す」ための能力主義的教育政策が、中央教育審議会委員に経済界の重臣を置き、国の「人材」育成（人づくり）をねらって教育界（学習指導要領→学校現場）に強く影響を及ぼし始めるのです。

それでも、70年代までは、いわゆる不登校（病気や極度の貧困以外での長期欠席者）はごく少数でしたが、70年代半ばになると不登校予備軍ともいえる生きづらさを抱えた子どもたちが表出し、保健室に押し寄せる事態が発生してきます。当時、保健室は「駆け込み寺」とか「ホッとルーム」「心の居場所」などと言われました。一日に100人近く押し寄せる学校もありました。この状況は予兆でした。80年代になると、こうした子どもの中に学校に来れなくなる子、教室に行けない保健室登校の子が徐々に増え始め、同時に、学校に来て荒れる子（校内暴力）やいじめをする子も一気に増え始めたのです。まさに、60年代から70年代にかけての競争主義的学校環境が子どもの実態にもろに反映してきたのでした。

しかし、まだ学校離反者が少なかった頃は、「怠学」とか精神科医などは「学校恐怖症・小児不安神経症・不適応症候群」などと病的な命名をし、長期欠席者の調査を始めた文部省は、病気や貧困以外の者を「学校ぎらい」とネーミングしました（66年～98年まで）。ここにも、生きづらくさせられている子への「まなざし」の問題が覗えます。この文部省の命名のまなざしに違和感を感じた研究者や精神科医たちは、80年頃から「登校拒否」という言葉を使い始め、学校関係者やメディアにもその語が浸透していきます。

文部省（当時）は、80年代になって登校拒否や荒れ（暴力・いじめ）が増えはじめると諮問委員会を設置し、その報告から様々な施策を講じ始めます（83年）。その報告では「校内暴力は反社会的行動、登校拒否は非社会的行動」という問題行動のレッテルを貼り、生きづらさの背景に視線を向ける姿勢はありませんでした。よって、登校拒否の主要因は、本人の性格特性・資質と親の価値観や育て方等の家庭的環境によるものとしたのでした。

また、70年代半ばからの「保健室への駆け込み」や「様々な心身のおかしさ・心身症的愁訴」「荒れやいじめ、性的逸脱行動」などが広がる中で、文部省・中教審からの諮問を受けた保健体育審議会は、その答申で、こうした現象は高度経済成長による豊かになった生活の「副反応」現象だと捉えました。だから、副反応対策としては、養護教諭による健康相談活動や生活習慣形成の徹底、カウンセラーの配置等を謳う一方、教員による生徒指導（校則等による生活管理）の徹底を答申します。その頃、民間では「戸塚ヨットスクール事件」が起こり、過激な指導の問題が話題にもなりました。

登校拒否に落ち込む親子に対し、行政ルートから、「子どもの特性や資質、子育てのあり方」に要因があると指摘された当事者は、一層苦しみ、親子心中を謀る事例も出ました。逆に、心ある精神科医や研究者の中には、「登校拒否は自己喪失を防御する無意識的な回避行動」であり、性格特性が未熟なのではなく、人間の備えた「健全な自己防衛反応」（渡辺位81）なのだと主張する報告もあり、それに勇気づけられた親たちの中には、公立学校に行かないでも子どもが育つ「フリースクール」運動を誕生させたりしますが、教育研究者からは、子どもが「行きたくない学校になっているなら、行きたいと思える学校にすることこそ本筋でないか」（竹内常一87）との主張も出てきます。

2　90年代に不登校が急増した背景をどう考えるか

80年代半ばまで吹き荒れた激しい校内暴力は、90年代になるとかなり沈静化しますが、登校拒否の子が急増してくるようになります。80年代末には4万人程度だったのが、90年代末には10万人を超えるまでに急増

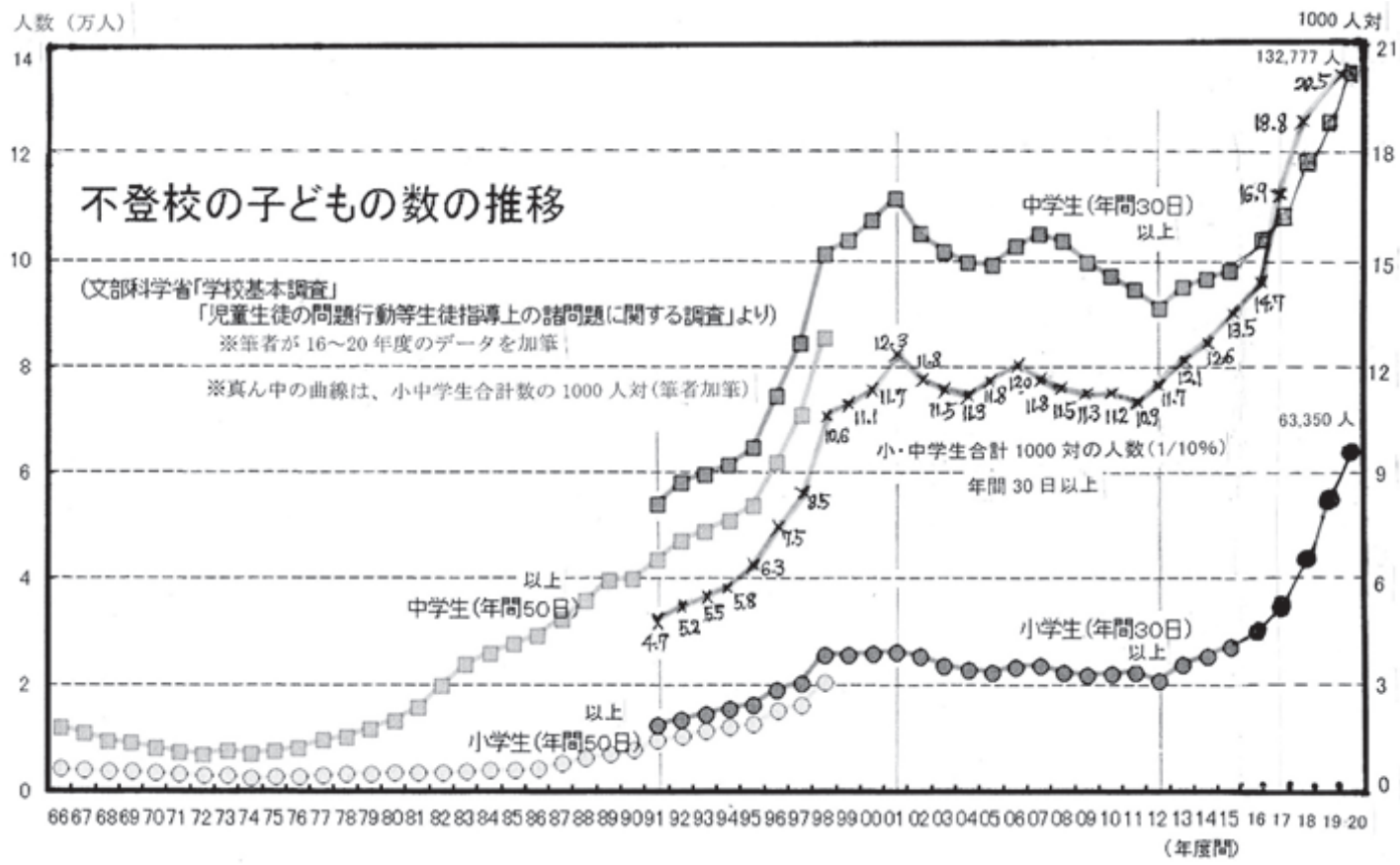
するのです。この頃から、登校拒否という用語や定義の問題も研究者や親からも意見が出されてきます。行けない子の親たちから、「前日夕刻には行こう・行かねばと準備をするのだけれど、当日の朝になると体が行けなくなる状態になるのであって、子どもが意図的に拒否をしているのではない、むしろ拒否させる要因は学校的環境の側にあるのではないか」、といった批判が出されてきたのです。

こうした状況下において、文部省は、80年代の親子の側の主要因説を取り下げ、また「学校ぎらい」や「登校拒否」の用語を撤回し（92年）、この現象は「誰にでも起こりうること」として「不登校」という当たり障りのない名称を打ち出したのでした。

この急増した時代をどう見ればよいのでしょうか。80年代の荒れやいじめ、登校拒否現象が広がるなか、文部省（中教審）の中にも「ゆとり教育」の主張が出始めますが、政治経済的には低成長時代が続き、乗り切る方策として、当時の中曽根政権は行政の大改革だけではなく、内閣直属の臨時教育審議会を立ち上げ（84年）、公教育の民営化・自由化を意図した「個性重視・生涯学習体系・国際化や情報化への対応」（最終答申87年）を打ち出します。規制緩和や新自由主義による市場競争原理の社会政策は、教育にも導入される状況になり、国民の経済格差が広がると共に、私立学校が倍増したり、学校でも習熟度別学習など、義務教育段階からの能力別学級編制や学びの個性化が進められ、「落ちこぼれ」や「輪切り」現象が一層広がります。つまり、学校教育が人間を育てる場より、国策の「人材養成」機関化が強まってきたのです。

社会の中では「勝ち組・負け組」というような言葉が広がりますが、そうした経済・社会格差が学校の人間関係にも反映し、その生きづらさと反映が、子どもの荒れや忌避現象が広がる要因の一つになったと考えられます。この状況は、公教育の「私事化」傾向をもたらし、義務教育段階でのそれまでの「機会均等性」を奪い、保護者の学校に対する意識をも助長し、わが子中心の学び・育ちの意識化、進路優先の学校観・教育観を誘発していきました。「子どもの貧困」が話題になり始める一方、裕福な子は週休2日制の始まり（92年）で、一層塾通いや有名私学の道に進むようになっていきます。

こうした中、「不登校」という文科省が使い始めた差し障りない表現



用語に対して、登校に（心身が）拒否状態を示す事実から、「なぜ・何を」拒否しているのかについて問うことの意義に注目し、意識的・意図的に「登校拒否」の用語を使うべきとする研究者（高垣忠一郎など）が出てきます。

3　2000年代に入っての高止まりから近年の急増をどう見るか

先のグラフを見てわかる通り、2000年頃から10年余り高止まり（発生率で見ると子ども総数が減っているのでほぼ横ばい）していた不登校が、13年頃から増加に転じ、15年頃から一気に急増し、毎年一万人以上が不登校増になっていきます。この現象は何が要因と考えるべきでしょうか。

90年代の急増で、文科省は、「適応指導教室」等を各地域で開設させ、そこでの一定条件を満たせば指導要録上の出席扱いにするなど、「学校復帰」の対処策をとりましたが、一向に不登校は減りませんでした。つまり、「適応指導教室」「不適応支援」「不登校対策委員会」というような対応表現に現れているように、「拒否」の要因や背景に目を背け、その改善を図ることのない「適応策・対策」では何も変わらなかったということです。

そこで、この期における文科省の対応は、この時期の10万を超える高止まり状況を何とか変えようと、「待ち」の姿勢から「積極支援策」への転換を図ります。不登校生の進学率の悪化やその後の成人引きこもり者増加への懸念があったからです。その積極策は、地方行政に数値目標を出させることでした。県別の不登校者数のナンバリングをし、順位下降の目標や半減計画等を立案させ、遂行させることでした。学力だけでなく、こんな課題にまで競争主義を持ち込み始めたのです。こうした無策な対処・方法主義、学校復帰者の数値のみを期待するやり方で、減少するはずはもちろんありませんでした。

その後も、第一次安倍内閣による06年の教育基本法改訂の断行を皮切りに、教育再生実行会議なる組織が立ち上げられ、様々な国家主義的な教育政策が継続断行されました。いじめ対策推進法、道徳の教科化、全国一斉学力テストの実施とその県別ランキングの公表、教職員の評価制度の遂行、ＩＣＴ教育の推進、教育の市場化路線の拡充、教育内容と方法のスタンダード化等々、学校教育現場の多忙化と息苦しさを一気に持ち込んだのです。

そうした学力競争を煽る動向と共に、学級定数減や教員の増員をしないまま、当時世界的な学校推進事業であったインクルーシブ教育（特別支援学級等）の導入も施策化され、一層教員の負担と混乱（競争教育をそのままに包括的教育を抱き合わせる矛盾）の状況が生じました。社会の経済格差の広がりと相まって、子どもの貧困格差と学力格差、多様な生きづらさは、いじめや暴力、不登校、そして自死といった問題を一層増幅させたと考えられます。こうした学校環境は、子どもの問題と同時に教員の過労や心身疲労、生きづらさとも重なります。教職への情熱ややりがい・生きがいを奪い、鬱的状態による休職教員を、6年間で一気に倍増し5千人を超えるまで増やしました（07年）。

20万人近くにもなる小・中学生の公教育離れの現実と、公立学校（一条校）外のフリースクールやオルタナティブスクール、私学等での民営化の広がりの中、政府は法的な対処をせざるを得なくなり、15年頃から超党派で国会審議を行い、性急に「教育機会確保法案」を決定しました（17年）。その翌年から施行となり、全国に不登校特例校なる学校が設置され始めていますが、見通し不十分な議論のもと、見切り発車した法案に対して、様々な思惑や意見も出ています。生きづらさを抱えている子どもの立場から、現実の公教育の問題や課題を真剣に問い直すことなく、教育の自由化・民営化を推し進めていいのか、どのように教育機会を確保しようとするのか、といった問題についてです。多くの苦しんでいる子どもとその保護者がいる状況下で、このあり方をどう考えるべきでしょうか。

4　子どもたちの生きづらさと不登校問題の課題は何か

①　不登校・登校拒否をどう捉え、その課題をどう考えるか

国（文科省）のこれまでの報告書や通達及びそれを受けた地方行政の文書を見る限り、学校に行かない・行けない子どものとらえ方、及びその要因把握や対策に何度かの揺れと変更があるものの、その対応の基本に問題があったと思われます。それは、前述してきた「学校嫌い→登校拒否→不登校」の名称変更や「不適応支援・適応支援教室」「不登校対策

委員会」「不登校特例校の設置」といった対処策の思惑、主要因を「子どもや親の特性・子育てのあり方」とする提起や「数値目標化やランキングの公表」での推進、といったあり方に如実に現れています。93年に登校拒否は「誰にも起こりうる」問題と規定し、「登校拒否」が漠然とした「不登校」という名称になりましたが、不登校の子が「なぜ・何を」拒否して無意識的な心身の拒否的状態が生じるのかをもっと真剣に問うべきでしょう。

先に見てきたように、戦後この約半世紀の間に学校という制度・環境の変化の中で、「就学の権利・教育を受ける権利・発達をする権利」を放棄せざるを得ない状況、いたいけないセンサー的愁訴が起きてしまう状況に、どれだけ大人が深慮をしてきたのかが問われます。この生きづらさを生み出している要因の深い吟味を抜きに、「適応指導や支援」「学校復帰の諸策」では、生きづらさから子どもを解放できないことを、先のグラフの曲線が如実に示しているのではないでしょうか。

この「拒否」の背景にあるプレッシャーについて、私は大筋で学校に対する政策的戦後史の中にあることを考察してきました。端的に言えば、次のように考えられます。戦後初期は、戦前の戦争反省をもとに「民主主義的な人間形成」とそのための「権利としての教育機会の平等」を法的根拠の下に運用してきました。それが、経済成長期を経て、社会的要請という外側からの論理で、国家が学校を経済成長を促す「人材」養成の機関と位置づけ、能力主義的な教育環境を醸成し、競争主義的にその能力づくりの諸策を実質化させてきた点にあると考えるのです。それが如実に現れたのが、経済の低成長が実質化した90年代とそれが絶えられなくなった２０１２年頃からで、そのこととグラフの２つの急増は見事に一致しているのです。

② 学校とはどういう場なのか、教育という仕事は何なのか

いま、学校を「楽しい！」と率直に反応する子どもがどれだけいるでしょうか？　コロナ禍が2年も続いた状況もありますが、その問題も含めてここ数十年間で「楽しい場の学校」は転げ落ちるように下降しているように思えてなりません。それは、同時に、全国の教員に「学校は楽しいですか？」「子どもと学びを創ること充実していますか？」と問う課題と重なっていないでしょうか。今日の教育政策の下で、教員は疲弊し、同僚性がなくなり、「チーム学校」などと上から言われながらも、生きがいを喪失しています。

子どもが「学校に行くのが待ち遠しい」「友だちと会えるし、遊べるし、一緒に学べるのがすごく楽しい」と言い、教員も「子どもってすばらしいね」というような声が聞こえてこなくなりました。かつてルソーは『エミール』の中で、「後では取り返しのつかない子ども時代を精一杯熟させる必要がある」と提言しました。学校・教育の大転換期にもう一度この声を取り戻したい。

だからこそ、こうした教育や子育ての中で、何を「育ちそびれ」させてきたかを考える必要があります。自分の思いや考えを言語や声、身体で表現して他者と交流し、共感や信頼感を育み、自己肯定の感覚や関係性を育てていく力（人格資質）を取り戻す教育、これこそいま必要なのではないでしょうか。つまり、幼少期から義務教育段階までの、人格の基礎を育む時期に、家庭や地域での遊び、入学後の人格形成上に必要不可欠な様々な学校生活や教育作用の吟味と再生をはかる必要があるでしょう。

不登校はマイナス現象とみられ、学校に行けない子は不適応な弱い子と見られがちでしたが、一部にそう言う一面が生じていたとしても、それは、近年の学校環境や教育の質的問題が要因であり、そうした教育環境に影響された大人の側の子育て観が影響し、「育ちそびれ」を生んできたのではなかったでしょうか。つまり、近年の学力主義的教育環境は、それ自体子どもたちにプレッシャーをもたらすと共に、人格的成長を促す教育の内実や質的基盤の脆弱性をもたらしてきたと言えると思うのです。

③ 当面、親や支援者、教育関係者は何をすべきなのか

不登校・登校拒否に悩む「親の会は」、すでに80年代半ばに発足し、近年では全国に何百もあり、全国的な組織もあるようです。宮城県や仙台市の中にもあります。かつて、ある学校の養護教諭が登校拒否の子を持つ親を組織し体験談を交流するセルフヘルプグループの活動を行っていました。そうした語り合いの中で癒やされ、夫婦の関係性や家庭での子育て観を立て直し、学校への要望も出し、教育環境そのものを問い直す

活動にもなっていました。また最近、仙台や宮城県内にもこうした親子を支援する組織や居場所があることを知りました。教育に関わる大学生の中にも、こうした支援組織ができていることも知りました。こうした支援者が繋がること、広がることを大事にしながらも、今日の公教育の学校の質的改善により、子どもの人格形成の場を充実させる運動と繋がることこそが必要だと考えます。当教育文化研究センターでも、今後、子どもの教育権を保障するこうした活動と結んでいく活動ができければと考えています。

その意味で、いま国策としてコロナ禍で唐突に進行し始めたＧＩＧＡスクール構想という、タブレットによる「個別最適化」学習なる教育改革が、子どもたちの人格形成にどういう課題をもたらすのか、今後この点にも注目していかなければならないと考えている次第です。

＊　＊　＊

下図（数見作成）は、子どもの人間的成長を図る学校の機能を、一本の樹木に例えたものです。生き物が成長するには、根っ子に当たる快い居場所（いのちが育まれる土壌）が重要です。子どもにとってはまずは安心安全と愛着です。その上に茎・幹が丈夫に発達していきます。人間に必要なのは、信頼と共感を得る親や仲間との関係性です。そこが安定していれば自己肯定感や自立と共生の力が育まれます。

学校では遊びや体験的学習（行事や特活・自治的活動・部活や総合的学習など）も幹を育てる上で極めて大切です。学力の認知能力も大事ですが、「何のための学力か」が常に問われなければなりません。りっぱな実や花が咲くには、根っ子と幹を育む環境こそ充実させ、すばらしい社会を築く実の稔りに結ぶことが必要です。

（センター運営委員長）

読者の声

先日、ある学年の廊下に、冬休みの課題であった絵日記が掲示されていました。その中に、「姉が成人式を迎え、一緒に写真を撮り、夜はごちそうで、かにをしゃぶしゃぶして食べておいしかった」という内容の絵日記がありました。それを読んだ私は、放課後、職員室でその担任の先生と話をしました。

「お姉ちゃんが成人して、夜もかにしゃぶを食べられて、とてもうれしかったんでしょうね」（私）

「そうですね」（担任）

「どこで食べたんでしょうね」（他の先生１）

「かに政宗ですかね。それとも家で食べたんですかね」（他の先生２）

「いいなあ。かにしゃぶなんて高級な物、食べたことないですよ（笑）」（私）

「私もないですよ。かに政宗の前はよく通るんですけどね(笑)」(他の先生２)

子どもの絵日記を通して、先生方と楽しく話ができました。担任の先生は、赤ペンで次のようにコメントを入れていました。

「お姉さんの成人式、おめでとうございます。おいしいかにまで食べられて、うれしいですね」

子どもは、このコメントを見て、とてもうれしかったと思います。

３学期始業式の日は４時間授業で、子どもたちは昼過ぎに帰ります。担任の先生は、おそらくこの日の午後に絵日記を読み、子どもたちの心に寄り添い、赤ペンで一つ一つの作品にコメントを入れていったのだと思います。

担任の先生方は、こういう仕事をたくさんしたいのだと思っています。しかし、現実にはなかなかできない状況があります。担任の先生方が、子どもたちのためにたくさん仕事ができる職場をつくっていきたいです。そういう学校は、子どもたちにとっても、先生方にとっても、いい学校なのだと思います。

（内海正之さん）

退職し、もうすぐ１年。高齢の母の介護や家事に追われる日々を送っている。昨年とてもうれしく感じたことがあった。

10月、母の外出に付き添い、帰宅した折の出来事。我が家の門柱の付近で、母が転倒。私ひとりでかかえて起こそうとしたが力不足で難渋していたところ、近所の男子中学生とそのお母さまが車から降りて来て、助けてくださったのです。男子中学生とお母様、私の３名で実母を起こし、ようやく家の玄関まで運ぶことができた。中学生は、親子で買い物に出かける途中、気付いてくれたとのこと。お二人にお礼を言い、中学生の名前を尋ねて、担任の先生にお知らせすることを承知してもらった。彼の担任は、私が教員時代に顔見知りだったので、すぐ電話で、このことを伝えた。困っている人を目にして、すぐ行動した彼のことを明日ほめてあげてくださいとお願いすると、担任は快く応じてくれた。

（小野寺修子さん）

安心して成長できる居場所を

長岡　美涼

私たちの「居場所づくりサークル にあ」は、不登校等のこどもたちの居場所を作ろうと、仙台市で教育や福祉を学ぶ学生が、２０２１年５月に立ち上げたばかりの学生ボランティアサークルです。こどもが安心できる居場所を守りながら、こどもとともに育つことができる繋がりのある地域や社会を創っていくことを目指して、現在は主に家庭への訪問支援を行っています。

「こどもの居場所づくりを始めたい」と思ったきっかけは、小学校での学習支援や、児童館におけるアルバイト、実習など、教育現場の現実を目にして疑問を感じたからです。

現在、不登校のこどもや、学校になじめないこどもが多く存在していることは、年々増加する不登校の児童・生徒の数を見ても明らかです。実際に、各学級・学年に空席があることや、学校にいる間、ときおり楽しくなさそうに過ごしているこどもの様子からも見取ることができます。そういった、不登校のこどもに対する方針としては、基本的には学校復帰が目標とされています。しかし、不登校になった根本の原因が解決されないまま、ただ学校に戻っても、また苦しい思いをするだけなのではないか。困っているこどもを本当に救うためには、どうすればいいのだろうか、と考えた大学生が集まり、団体設立に至りました。

実際に支援に入る中でこどもから話を聞いてみると、学校で、自分がしてしまった失敗を、先生からひどく叱られたこと。そういったことが自分以外にもあり、怖かったことを話してくれました。それでは、うまくできたかできなかったか、という基準のなかで、失敗してはいけない、という恐怖にいつも駆られて過ごさなければならなかったと思います。

学校でたくさん初めてのことを経験することも時代において、トラブルや失敗は、当然起こります。だからこそこども自身が、成功も失敗も糧にしてはじめて、成長できることを学べるかどうかは重要です。しかし、不登校のこどもたちにとって学校は、頑張ってやったことも認められなかったり、自分自身を周りと比較して、できない自分はだめなのだと否定してしまったり、周りの誰も信じることができない、安心して過ごせる場所ではなかったことがわかりました。安心して過ごせる場所でなければ、失敗そのものが怖くなってしまいます。学校に居場所がなくなってしまえば、学校と、家庭という狭いコミュニティの中で生活しているこどもは、自分で新たな居場所を見つけることは困難です。「ふつうのこ」が学校に行っている日中は家にいるしかなくなり、することもなくなってしまう。「ふつうのこ」ができていることができない自分は、ここにいてはいけないと、学校を離れても自分を責め続け、「自分にはどうせできない」「死にたい」と、こども自身に思わせてしまったのだと思います。

対して、実際に学校現場の教員の声を聞いたり、国のアンケートを見てみたりすると、そういったこどもたちに対して、「何か原因があるのだろうけど、なんで学校に来ないのかがわからない」、「こどもが無気力になってしまったことが原因じゃないか」。そして、「どう対応すればいいのかわからない」、と感じていることがわかりました。日本の教員は、世界的にも1クラスで受け持つ児童・生徒の数や勤務時間も多く、先生たちの多忙さはトップクラスだと言われています。また、仙台市には多くの、こどもの居場所となる場所や団体がありますが、「なにかあったら、児童相談所にいくしかないのでは」と、そういった居場所の存在が、こどもたちもその保護者たちにも十分知られていないことも事実です。こどもの力になりたい、寄り添える教師でありたいと勤務していても、背負いきれないほどの業務量の中で一人ひとりを見きれず、外に助けを求めることもできず、そういった思いが埋もれていってしまっていると感じます。

そして、実際にこどもたちや、その保護者の方が学校に対して感じていることと、現場の先生が感じていることにあるズレが、不登校で苦しむこどもの数を増やしてしまっているのではないでしょうか。

私たちは、必ずこどもや、家庭の立場に立ち、

学生だからこそできる居場所づくりをしていきます。今、悩み苦しんでいるこどもたちが、「自分はここにいてもいいんだ」、「外の世界もそんなに怖いものではないのかもしれない」と思え、不登校になったからこそわかる痛みを糧に、前を向いてこれからの人生を生きていける居場所を、学校の内外に広げていくことが必要です。また、そういったこどもたちを今後生みださないために、現場にあるズレを埋めていけるような、学校をなかから変えていける学生を育てていきたいです。そして、すべてのこどもがのびのびと過ごし、安心して成長していける地域・社会を創っていきたいと思っています。

（宮城教育大学・学生）

私の子ども時代から考える学校
～道はひとつじゃない～

日沢　慶輔

私は現在、特定非営利活動法人ぶれいんはーと、特定非営利活動法人慶友舎、というＮＰＯ法人を運営しております。

活動内容としては、不登校やいわゆる軽度発達障がい・知的障がいによる療育のこと、精神的な悩み、またはひとり親や貧困などで子育てがしづらいと感じられているご家庭とそのご本人に寄与し寄り添うことを主としており、個別的で家族的なサポートの中で、子どもたちに居場所を感じてもらいながら教育をしていこう、という団体です。

私がこのような活動を行うようになった背景には、私の生い立ちが強く関係しています。私はひとり親の世帯に生まれ父を知りません。加えて生まれつきの呼吸器の持病を抱えており、命の危機も何度か体験しています。小学校入学以前の小さな頃は、多くの時間を病院のベッドの上で過ごし、その後、義務教育の年齢の頃も半分程、年によっては3分の2程度しか学校に行くことのできない幼少期を過ごしました。その渦中、みんなと同じように学校に行けないが故に、学習についていけないもどかしさ、行事や体育に一緒に参加できない孤独を感じ、いじめのようなこともしばしば起こりました。高校進学後も持病の為に休学・退学を余儀なくされ通信高校で学び、大学進学へのチャンスも一時療養の為に見送らざるを得ない時期もありました。

そのような中で、貧困の問題も重なり、当初は「なぜ自分だけがこんな目にあわなければならないのか」と落胆した時期も多くありました。様々な方々との出会いに恵まれた通信高校時代をきっかけに、画一的な教育ではこぼれ落ちてしまう人もたくさんいて、私のように学びたい気持ちが強くても今の制度や環境ではままならない人、それ以前の生活や子育てが立ちゆかない人にも、寄り添う教育やその土台を支えるサポートが必要なのではと思うようになっていきました。

その後、人より遅れての大学入学・卒業となりましたが、在学中には教職免許や心理士の資格取得を目指す傍ら、先の思いを体現するために、公立の小学校で特別支援教育の補助を行ったり、現在運営する団体の前身となるＮＰＯでの仕事を始めました。これが今日の私の仕事につながる一歩となりました。

またこの頃から「発達障害」という言葉を多く耳にするようになり、呼吸器の持病とは別に、私自身が学習場面でしばしば感じていた違和感が、これによるものとわかってきました。

私が活動の当初から大切にしていることは「道はひとつじゃない」というメッセージです。

先述のように、ひとり親や貧困、持病により登校できないつらさ、発達の難しさを抱えながらの学校生活など、様々な生きづらさを感じながら学校と関わってきました。いわゆる普通の子どものように学校へは行けませんでしたし、進路に関しても他と比べてしまえば常に数年遅れで進めてきました。「それだけのこと」「そのような人はたくさんいる」「今自分の道を見つけているのだから良いではないか」などの声がけをされることも多くありましたが、実際に当事者を体験するとそう一言で語れるほど簡単な問題ではないと感じています。

一例として発達の側面で言えば、小・中学校時代、私は大抵のことは問題なくできるのに、文字の書き取りや漢字・英単語のテストとなると途端に何もできなくなるという悩みを抱えていました。当時、一部の教職員から「みんながちゃんとやっているのに、なぜできないんだ」「すこし甘えが出ているのかもしれない」という様な声がけをされたり、逆に「じゃあ、みんなと一緒は無理かな？」と挑戦すること自体を遠ざけられたりすることもありました。また病気の面では、本当に体調が悪く保健室を使わせてほしい場面や、早退や遅刻をすれば何とか学校には行くことができる場面でも「本当はサボりではないか」「態度が悪いのでそのような願いは聞けない」、または命の危機があるような状況でも「日沢に何かを任せるとこれがあるから困る」といったような趣旨の声がけをされたことを覚えています。

このようなことが積み重なり、私は持病や発

達の部分で「私が悪い」「自分がダメだから、こんな目にあうのだ」と思うようになりました。本当は困っている部分さえ、少しサポートしてもらえば、できることも多いのに、本当はもっと学校に行きたいし勉強もしたいのに、という思いは段々と叶わなくなっていったのを覚えています。いま学校で生活をしている子どもたちにはこのような思いをできるだけしてほしくはありません。

当事者から支援者に立場が変わっても、前述のような息苦しさはしばしば感じていることでした。不登校や特別支援を考えるときに、いわゆる「普通」の子どもたちが中心で、それ以外の子どもたちをどれだけ普通に近づけるのか、としているとも思える対応が学校内外を問わず散見されました。その子どもが何に苦しんでいるのかよりも、とりあえず数分でも校門をくぐったら出席になるからと嫌がる子らの手を引いて学校に連れて行ったり、他方では周囲との足並みが揃わないからと個室でずっと待機させられたり、このようなことは一例や二例ではありませんでした。

私は、大部分の人とは異なる学校生活を送ってきましたが、多くの人に合わせていくことを第一とはせず、自分のやり方・ペースでやってきたからこそ今日があると考えています。そうでなければ確実に今の私はないと思っています。だからこそ私がサポートを行うときには、一般的に理想とされることではなく、子どもたちそれぞれが何を望み、どこに困難さを抱え、どうなっていけたら良いと思っているのかに最大限、耳を傾けたいと思って活動を続けております。

実際に、ご家族と協力をしながら、本人のペースに寄り添ったり、内なる気持ちに耳を傾け続けた結果、長期に渡るひきこもりが解消されたり、学校や勉強を嫌い一切学習をしなかった子どもたちが、自ら学び、進路を定め直し、進学・就職をする姿を目の当たりにしています。

これからの学校においては、健常や障がい、登校・不登校、貧富の差を問わず、ぜひいま一度、一人ひとりが別々の個性であり、それぞれの成長の仕方を持っていると考え、できる限り寄り添いながら、子どもたちが学校に行きたいと思えるように、環境づくりをしていただけたら幸いと思っております。

（NPO法人ぶれいんはーと・慶友舎）

顔の見える関係の構築を

伊藤　雄高

NPO法人アスイクでは2015年から自主事業としてフリースクールの運営を開始し、2021年度からは仙台市の委託事業として、仙台市子ども相談支援センター「ふれあい広場」のサテライト拠点として運営を行っています。

私自身は仙台市適応指導センターの相談員を6年間務めた後、アスイクの居場所事業を担当して3年目になります。

これまで10年近く不登校支援に携わってきたなかで、様々な家庭・学校間の状況を目にしてきました。

私が不登校支援を始めた当初は、まだまだ学校復帰が当たり前と考えられていた時代で、保護者の意向、学校の意向共に学校復帰を望むことが多かったように感じています。

今では不登校問題がメディアでも大きく取り上げられることも増え、社会的な課題意識も高まり、保護者の意向は学校復帰よりも、本人が自分らしくいられる居場所を求める方針に切り替わってきている実感があります。

また、学校でも教育機会確保法にもとづいた令和元年10月25日付の文科省通知以降、学校に無理矢理戻すよりも、適応指導教室やフリースクール等と連携していくという動きが徐々に強まっています。

このように両者が同じ方向を向いているように見えても、家庭・学校間で連携がうまくいかない例は少なくありません。いくつか例を挙げます。

① 学校は教科学習をさせたいが、本人・保護者にはまだその意欲・意志がない。

② 適応指導教室やフリースクール等への通所ができていることから、学校の別室にも登校できると考え、本人に対して過度な登校刺激を与えてしまう。

③ 学校は適応指導教室やフリースクール等への通所を認めており、過度な登校刺激を控えているが、そのことから保護者が学校に見捨てられたと考えている。

これらはあくまで一例に過ぎませんが、往々にして見られる課題だと思います。それでは、これらの問題は何が原因で何を是正すれば良いのでしょうか？

①②は学校が本人の状況を正しく認識できていない可能性があります。③は家庭が学校への不信感から、学校側の配慮を汲み取れていない可能性があります。

それでは、①②は学校側の問題、③は家庭側の問題と片付けて良いのでしょうか？

私の認識ではそれは正しくありません。相互

の問題になるのはコミュニケーションです。①②に関しては、保護者が本人の状況を学校に伝える必要があったかもしれません。③に関しては学校側が対応の意図を保護者に伝える必要があったかもしれません。場合によっては、伝えたにも関わらず、受け取ってもらえなかったというケースもあるでしょう。

いずれにしろ、それはコミュニケーションの問題だと考えています。

不登校状態については、保護者も学校も一生懸命考えているにも関わらず、お互いに齟齬があり、支援がうまくいかないケースをたくさん見てきています。

ここで、学校外の居場所を担う私たちのような存在が必要になってくるのだと思います。

私たちが担うのは不登校状態の子どもたちの居場所作りが第一義的な目的ですが、次に担っているのは、家庭・学校の間に入り潤滑油となることなのだと感じています。フリースクール等は、立場上学校との対立関係が生まれやすい関係性にあると思います。「子どもの最善の利益」を考えたときに、それは望ましいことではなく、あくまで立場の違いは明確にしながらも、協力関係を作っていくことが必要です。

不登校問題は非常にデリケートで、当事者である家庭と学校のみに収縮してしまうケースが少なくありません。第三者が介入することは容易ではありませんが、通所している適応指導教室やフリースクール等が間に入ることで、相手側の意図を正しく伝えたり、当事者間の冷静な話し合いを促したりすることができることもあります。

私たちが「学校の意図はこうなんだと思いますよ」と少し伝えるだけで、「そういうことだったんですね。それなら納得です」と簡単に課題が解決してしまうこともあるのです。

最近ではしきりに官民連携が謳われて、情報交換会も行われるようになってきています。しかし、まだまだそれは形だけの連携に過ぎないように感じます。学校の先生方が適応指導教室やフリースクール等の実態をどれほど知っているのかは疑問があります。私たちの立場からもステーションでの取り組みを話では聞いていても、実態はよく知らないというのが実情です。

今後の不登校支援の最大の課題は担当者間の連携、相互に顔の見える関係を構築していくことだと思います。子どもを中心に置くことでたくさんの大人たちが関わり、その大人たちが協力して子どもを育んでいく。そのような不登校支援の現場を作っていくために、連携強化にむけて尽力していきたいと考えています。

（NPO法人アスイク）

「不登校」から「進撃の不登校」へ

村松　稔

1　はじめに

長男は、怒り等の負の感情コントロールが苦手だけど、外遊びが好きな子だった。小学校入学してから小2までは、勉強は嫌いだけど足が速い、どこにでもいそうな小学生。そんな彼が小3になると勉強に手がつかなくなり、小4の後半から学校に行かなくなった。現在小6で春から中学生である。ここではそんな彼とどう向き合い、いまどういう現在地にいるのかをおおまかに書き記しながら、今日の学校と不登校について私なりの考えをまとめてみた。なお、ここでは学校に戻ることで不登校の解決とは考えていない。

2　不登校は危機か希望か

親が外で働き子どもは学校へ、というこれまでの働き方をベースとしたライフスタイルは、不登校をそもそも想定していない。しかし、子どもの不登校を経験する家庭の多くは、そうしたライフスタイルが通用しなくなり、根本から見直す必要に迫られ大きな危機を迎える。特に核家族の共働き家庭であれば、その度合いは深刻である。我が家も例にもれず危機に直面した。

ここで心理学者のE・H・エリクソンの生涯発達理論を引用しながら、理解してみたい。エリクソンは、人は一生をかけて社会文化的に発

達するが年齢に応じた各発達段階で危機があり、それを乗り越えると力になると説明した。

これを踏まえると、こうした危機への解決には子ども本人にとどまらず、家族という小社会、いわば家族チームでの解決も含まれると理解できる。子どもが不登校となった時に、家族ぐるみのチームとして解決に当たることができれば、子としても親としてもそれは後に繋がる力、いわば未来への希望となることが期待できる。そういった意味では、不登校は家族としての幸せのあり方を問う契機ともいえるのではないだろうか。

3　居場所のチカラ

小4後半から不登校となった長男だが、無理に行っても本人のためにはならないだろうと判断し、学校を休ませた。以来、小5のコロナによる休校期間にかけて、居場所を求めて仙台市が運営している適応指導センター「児遊の杜」や数少ないフリースクール等を探し歩いた。こういった家庭でも学校でもない第3の場所に出かけたことは、親が働きに出るためという大人の都合であったことは否定できない。しかし自然の中での遊びや魚釣り、特にこの頃から興味を持ち始めた魚さばきを通して、少しずつ成長する準備ができてきたように思える。振りかえれば入学以来この頃に至るまで、学校の教室での学びよりも、彼に本当に必要だったのは実際的で体験的な経験からの学びだったのではないか。今の学校ではそうした活きた学びの場面が少なく、学ぶ楽しさをどこまで伝えられているのか心配である。

また第3の場所に一緒にいた人たちとのコミュニケーション、特に親でも先生でもない大人との斜めの関係も大事な経験になっている。学校という大人への不信感が生まれてた長男にとって、心を許せる大人がいる体験は貴重だったのではないだろうか。

4　未来を自ら選び取る

子どもたちには常々「本来学びは面白いもの。学ばされるものではない」と伝えている。映画『みんなの学校』の舞台となった大阪市立大空小学校の元校長先生である木村泰子さんがある動画で「学力って一人ひとり違う。（略）一人ひとりに必要な学力は、子どもが掴めばいいことです。私たちが与えるんじゃなくて」と語っておられた。同感である。今の学校は学びを与えんとするあまり、本来子どもが持っている活き活きとした主体性を損なっている気がしてならない。

コロナ休校明けの小5の6月から別室に通い始めた長男は、来春県内の小規模特認中学校への進学を自らの意志で決めた。本人にその選択肢を示したのは私たち両親だが、体験入学を経て入学を決めたのは彼自身である。私は彼のその様子を見て漫画『進撃の巨人』に登場する9つの巨人のひとつで、未来を見通す力を持つ巨人の名にちなんで「進撃の不登校」と呼んでいる。自分の行動（未来）を自分で決定しているという自己決定をもつことは、内的動機付けや有能感を高めるうえで重要な事とされており、小さい頃から家庭や学校で自ら判断行動する習慣をつけることは、その後の人生を送るうえで大切であろう。さて、学校ではどれほど子どもたちが自己決定しているのだろう?

5　最後に

こうして我が家なりに不登校と取り組んできたが道半ばであり、ここに至るまでも遠回りの感がある。明日にでも対応したいが、各相談機関への予約が数か月～半年先となることは当たり前が現状である。子どもの成長は待ってくれないので、もどかしさは常にあった。そして学校の内情が保護者に見えにくく、また学校の初動が遅いことも残念である。これらは大人たちに課せられた未来への宿題としたい。

紙面の関係から多くを割愛したが、長男がここまで成長したことは、関わってくれた多くの方々のおかげである。筆末ながら厚く感謝申し上げたい。

（ファザーリングジャパン東北・田子小ＰＴＡ会長）

不登校は『自分らしく生きる』生き方の選択

遠藤さち子

「お腹がいたい」「学校に行きたくない」

期待に胸を膨らませ、楽しみにしていた小学校生活が始まり3か月が過ぎたころ、娘が学校に行けなくなった。

「今日は行ける」とランドセルを背負っても、玄関で足が止まる。泣いて嫌がる。なぜ行きたくないのか、なぜ行けないのか、理由を探してはどうにか学校に行ける方法を考えた。

遅刻や早退をしながら過ごすうちに、どんどん子どもの元気がなくなり、ついに布団から起き上がれなくなった。振り返ってみれば、その場しのぎの対応策だったと思う。

優等生だった保育園時代とは全く別の子どもになってしまったようで、胸が苦しくなる。子どもの命、学校、将来への不安、現状が良くないことはわかるのだが、何が子どものためになるのか、

これからどう行動したらいいのか、当時はわからず悩んだ。

学校の先生はもちろん、学校以外にも相談先を探して問い合わせた。誰に相談しても「愛情不足」と遠回しに言われているようでとても辛かった。3人目の子どもが生まれたばかりで、精神的にも体力的にも限界。精一杯がんばっているのに、これ以上何をがんばればいいの？　生きることが辛くなってしまった。

そんな中、仙台市泉区で不登校の親子の心中事件が起きた。当時重く悩んでいた私にとっては他人事ではなかった。不登校は命に関わることだと思い知った。

そして、少し冷静になることができた。何があっても生きていてほしい。子どもの元気な姿を見たい。学校とは距離を置き、私自身の心が安定することを優先した。子どもの心と体が回復することを考え、家が安心できる場になるように過ごした。

そんな生活を続けていくうちに子どもは少しずつ元気になったが、当事者との繋がりはなく、孤独だった。このままで大丈夫だろうか。他の不登校の子を持つ家庭がどうしているのか気になっていた。繋がりを求めていた。学校以外の居場所を探してたどり着いたフリースクールは小学生が集う居場所だった。

「ここに仲間がいた！」と、親子ともに心に光が灯る感覚だった。仲間と一緒の時間を過ごすうちに子どもの表情が変わった。家にいる時よりも、もっともっと元気になった。前向きにいろんなことにチャレンジしたいという意欲が戻った。

家でも学校でもない第3の居場所があるということ、ありのままの子どもたちを認めて見守る大人の存在があるということが、これほどまでに大切なのかと気づき、心から感謝した。

不登校は年々増えて低年齢化している。低年齢の子どもたちは留守番が難しい場合が多く、親の働き方すらも変わってしまう。家から出られずに孤立してしまう親子もいる。私たち親子のように、低年齢の子どもと親が集う場の必要性と、社会と関わりを持つことのきっかけ作りになればと、私たち親子で居場所活動『クローバー』を始めた。

活動開始から2年が経ち、支援してくださる方も増えた。現在は仙台市若林区に拠点となる一軒家で週に2回、屋外での活動は不定期で活動している。集う子どもたちは3歳から15歳。退職した先生やボランティア、お母さんたちに支えられ活動できている。

学校との関わりも持ち、行事に参加する日もあるし、友達と遊ぶ日もある。学校の友達が、不登校の子どもに対しても、他のみんなと変わらずに接してくれるのは、先生方の配慮のおかげと感謝している。とは言え、まだまだマイノリティーだ。元気なのになぜ学校に来ないのかと言われることもある。いつまでも元気がなく可哀想な不登校でなければ社会が納得しない。

不登校は生き方の選択。不登校の子どもたちの多くは、学校に行かないことで元気でいられる、生きていけるのだ。

残念ながら、現状では学校やスクールカウンセラーの一部は、学校復帰以外の選択に対して寛容ではないと感じる。特に小学校では理解されないことが多い。保護者の多くは我が子が不登校になることを予想していないことも多い。私自身がそうだった。子ども自身もまさか自分が不登校になるなんてと戸惑い深く悩んでいる子もいる。誰しも不登校になりたくてなっているわけではない。

けれど、学びの拠点を家庭やフリースクールに移して感じるのは、子どもたちは可能性の塊ということ。

先生方にも、子どもたち本来の生きる力や学ぶ意欲、将来の可能性を信じてほしい。失敗してもいいじゃないか。

みんなと同じを求められることや、異質が排除される環境、同調圧力……それらがない学校はどうしたらできるのか？

ＳＮＳが普及して全国の学校（公立校を含む）でどんな取り組みをしているのかが簡単に手に入るようになった今、先生よりも保護者の方が持っている情報が多いと感じる場面もある。

「みんな違ってみんないい」多様性のある学校、子どもたちが自らの意思で考え行動する。自分らしく生きられる学校を夢見ている。

（親と子の居場所「クローバー」主宰）

授業への招待 ⑤

楽しいほうがいいじゃない

林　由貴

特に1年生は顕著だ。入学前の経験が様々だし、落ち着きなく動いている子も多い。一方では、算数を学ぶのが初めてではなく、すでに算数は嫌い、もう嫌だ、自分はできないと思っている可能性もある。「今年の新入生は……」と愚痴を言う前に、子どもたちを理解し、子どもたちに合った学習を工夫しよう。

次からは、『どの子も楽しみ、遊びながら算数を身に付けよう！』と目標を立てて実践したものを紹介する。

1年生　学級開きの話

入学式の翌日の朝、教室からすぐの校舎裏に（勝手に）出て、池をのぞいていた子どもたち。私が行くと、教室でオタマジャクシを飼おうと話が出た。「どうやって？」「本で調べればいいんじゃない？」それらしき本を手に取り、みんなでペラペラとめくる。そして見つけてしまう（私が）。「金魚のえさでいいなんて知らなかったよ！　飼育ケースが理科室にあったはず。これなら飼えるよ」と、私が一番やる気になっていた。「じゃあ先生、えさ買ってきてください」完全に子どものペースだった。そして、これは私のペースでもある。すてきだと思った。授業は、子どもとわたしで創るもの。こんな豊かなことができる子どもたちとなら、きっと授業も楽しんでいける。

操作活動はみんなのもの

算数での操作活動の大切さは言うまでもない。ただ誤解されたくないことは、操作活動は、理解が難しい子どものためにあるものではない。算数の理解には、たくさんの操作活動が必要。教科書の絵を見るだけや、数字で計算できるだけで安心はできない。それだけでは、正しいイメージを作れない。手をたくさん動かしながら、すべての子どもたちが理解し、安心して学習できる授業づくりをしていこう。時間をかけたその操作が計算方法そのものになり、豊かなイメージとともに理解される。よい操作は、楽しい活動になるだけでなく、いつでも使える基本となり、子どもも教師も助けるものになる。

入門期・算数の授業

いくら教師が一生懸命に学んだことを授業に取り入れても、目の前の子どもたちに合っていなければ何にもならない。子どもたちに総スカンを食らわないために、何ができるのか、目の前の子どもたちを知ることから始めたい。

（1）集合としての仲間集め

座っていないでどんどん動こう。ごちゃごちゃしても、ルールの大切さが分かれば、いろいろなことができるようになる。

T：1年1組のみなさん、集まれ～。

C：（わいわいいいながら、教師の周りに集まる）

T：今、集まったのは「1年1組のなかま」です。

（一度戻らせてから）1組の男の子集まれ～。

C：（ますます笑顔）

同様にして、「朝、みそ汁を飲んできた人」や「赤い服を着ている

（イラスト／町田美桜）

人」など、様々な『なかま』を集めて遊ぶ。これができると、フルーツバスケットもできる。

（2）1対1対応

はじめは、「帽子と1年生」で1と1で比べる。身の回りのものをたくさん考えるとよい。

次の段階のために、図工の時間に折り紙遊び。チョウと花をたくさん作る。子どもたちが帰った後、模造紙に貼ると算数教材のできあがり。教師の教材準備の時短だけでなく、自分たちで作ったものが使われることで子どもたちの学習意欲が高まる。

もったいないけど、線でつないで使う。写真左のたくさんすぎるチョウと花も線でつないでいるが上手くいかない。それでブロックなどの物を置いて比べることになる。

（3）5までの数

「1から10までなんて、知っているのが普通でしょう。」と考えていると、ガツンとやられることもしばしばある。元気に10まで数えたかと思えば、ブロックの「2個」と、数字の「2」が結びつかないことがあるのが1年生だ。まずは5までの数で1対1を使いながら、ゆっくりと楽しむ。

物「●●●」
タイル「□□□」
ことば「さん」
数字「3」

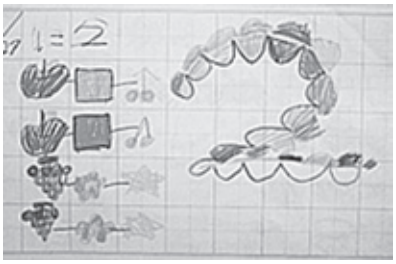
T：（ブロックを3個提示して）先生と同じだけブロックを出しましょう。どうして同じだと分かるの？

C：1と1をすればわかる。

T：では、これと同じだけ鉛筆を出そう。

T：この数を「さん」というよ。

具体物や絵カードで「さん」が集められたら、それぞれがノートに絵を描いて集める。



（4）神経衰弱で3者関係を

1から9の数のカードを3種類作る。まだ文字を読めない子もいるので、数詞「さん」は作らない。タイル以外は子どもたちが書くとよい。

カードをめくり数が合えばもらえる。一人1回ずつで順番に。数が合っても続けない方が、みんな頑張れる。また、1年生は「ここだよ～。」と、友達に教えるのも得意なのが楽しい。教師がルールで厳しく取り締まらず、自分たちに合ったものに変えていくのも楽しいのだ。

※ 詳しくは『数学教室』№802、№836（あけび書房）

（川崎小）

読者の声

来年度から学校は2学期制がスタートします。この中での課題や実践など「センターつうしん」で情報交換を期待します。

教員時代から現在まで、約25年間、名取市内11ヵ所のすべての児童センターでけん玉教室を続けています。今は、コロナ禍で気をつけて、参加人数は少なくなっていますが楽しくやっています。年間11×6回の66回を楽しんでいます。（大沼宗彦さん）

Ａ４サイズを縦横に使ってのレイアウトと文字サイズを大きくしたことで、おおらかな気持ちで拝見できました。

GIGAスクールは多様な視点からの意見交換によって、現場での苦悩や評価の違いなどが浮き彫りになりました。「俺」という表現は、文字にすると行儀の悪さが際立ちますので、発言者の了解を得て直してもいいのではないでしょうか。

子どもの風景に始まり、俳句に映画に読書に子育て記、押さえどころを示す編集後記。面白さも出てきました。「教育を考える広場」が充実し、楽しみが増えました。

（小山田幸雄さん）

●教育時評（新年度を迎えて）

じっくりと考えて

山沢智樹

■3年目を迎えて・・・

私事ですが、宮城に来て、また短大・大学の専任教員として勤め始めて、3年目を迎えました。ということは未だ収束の方途が見えないコロナ禍の期間と重なります。自己紹介で、冗談交じりに言うこともありますが、自分の中では、胸がキュッと締め付けられることも少なくありません。

学校における3年とは、一体、どれほどの期間でしょうか。中学校や高等学校では、あのとき入学してきた彼らがそこの学校での最後の1年を迎えます。小学校では、あのとき4年生で、高学年の仲間入りを果たした彼らがそこの学校での最後の1年を迎えます。あのとき入学してきた彼らは3年生。学校生活にも慣れてわんぱく盛りとなってくる頃でしょうか。

勤務先の2年制の短大では先日、あのとき入学してきた彼らが卒業し、それぞれ次のステップへと踏み出していきました。彼らにとって、短大でのこの2年間はどう残っているのだろうか。聞いておかなければと思いつつも、限られた想像のなかでも、彼らの叫びを受け止めきれる自信もなく、そのまま送り出しました。

〈大人〉の感覚で3年、3歳年取ったと言っても、21世紀に入って22年目、戦後77年、近代学校が始まって500年近く、人類史500万年、地球46億年。そういった時間と比較すれば、ちっぽけなものかもしれません。しかし、3年という時間は、ことわざにも「石の上にも三年いれば暖まる」と言われるように、ある程度の一人前になっていくための永い時間を指しもします。コロナ禍と呼ばれる期間が、そんなにも永い時間となろうとしているのです。

■3年目をどうするか

関わって3年目にもなる子どもには、やはり、それだけの成長を求めたくもなるでしょう。他方、コロナ禍3年目のわたしたちは、何をしてきたでしょうか。「どうしていいかわかりません」と途方に暮れているばかりではいられません。

わたし自身、大情勢ばかりに目が行き、〝ダラ〟〝レバ〟を繰り返して現実から目を逸らしたくなることは少なくありません。こうした思索にも意味はありますが、今一度、自分がいる場を見つめなおして、「できること」を積み上げていくことがなお重要です。閉じられた思索のみでは、他の誰とも共有〈シェア〉することはできません。

他方で、一人の人として、子どもも含めて他者とかかわる際には、相手のことが知りたくて、相手に対して「自己開示」を求めたくもなります。しかし、自己開示することや丁寧な自分語りとは、とても難しいものです。これまでの教育実践の蓄積が教えてくれているように、語ること自体、応答する他者がいることで初めて、成り立つものです。「わたし」も含めた「みんな」で、「みんな」の語りをそれぞれ成り立たせるような関わり方が今、求められています。

2年前、いくらかの伝手（つて）はあったものの、ほとんど初めての地であった宮城に来て、わたしが「みんな」とかかわることができる場の一つが、このみやぎ教育文化研究センターです。毎月の『教育』を読む会で、いつも、新鮮な気づきを得ています。多忙、ネガティブになってきたときに、自分がいることを忘れられない場を持っていることは重要です。がんばることをプラスしていくだけでではなく、癒されることをプラスしていく発想です。

■自分の〇〇を考える

自分で考えることを放棄した、内容〈コンテンツ〉丸暗記の学びが批判されるのと同じくらいに、気を付けなければならない

ことが、自分の頭で考える、自分のことばで考えることではないでしょうか。もちろん、考えるには時間がかかります。

今や、ネットで少し検索すれば、日常生活にかかわる大概のことは、どこかしらの誰かが説明やアドバイスを発信してくれています。簡単なこと、些細なことを確認する際には非常に便利です。しかし同時に、この世に溢れる情報をどれだけ吟味できるかが一層重要になってきています。

大学で担当する科目の期末試験で論述問題を出題する際、わたしはどのような主張であっても、試験という機会における、説明の仕方、情報の選び方を重視しています。それは、自分が一つの答案を作成しているという自覚です。学生たちの答案を読んでいると、授業や試験勉強を通じて、学生たちが何に気が付いたのか、どんな結論に至ったのか、自身の授業の至らなさも含めてひしひしと伝わってきます。そんななかで、心に余裕のない解答ほど、ネット記事の〈引用〉や授業で配った資料からのそのままの抜き書きをよく見かけます。

このことは、わたしたちの日常にも当てはまるのではないでしょうか。時間をかけるほどでもないことを調べたり、確かめたりする際には、ある程度（3〜4割で十分でしょうか？）納得できれば終わりと、簡単に済ませることができます。しかし、自身が夢中になっていることや、本当に悩んでいることであれば、さまざまな情報に行き着いても、「ああでもない、こうでもない」としばらく突き詰めていこうとするでしょう。食事のメニュー選びに悩みはじめると、止まりません。

このように考えてきたとき、自分自身が、生活や仕事、職場のなかでどこにこだわっているのかが自ずと見えてくるでしょう。もちろん、「やらなければならない」と頭でわかってはいても……ということも少なくないでしょう。しかし、等身大の自分と向き合うということは、こういうことなのではないでしょうか。

■ 人と向き合う仕事であるからこそ

丸暗記の学びが批判的であったり、皮肉的に語られるのはそれ自体の異常さに加えて、意識的、無意識的にせよ、教育者が学習者に対して丸暗記の学びを求めてしまっていることもあるのでは、ないでしょうか。学校やセンセイが皮肉的に語られる場面の最たるものと言えるでしょう。

このとき、教育（者）の目は、学ぼうとする〈人〉ではなく、学ぼうとする〈人〉に無理やりにでも詰め込もうとしている〈モノ〉へと移っています。教育や学習を巡っては昨今、たしかに社会から剛柔さまざまに影響を強く受けています。そうであるとしても、学んでいる一人と、それを支える一人としての関係を忘れてしまったときには、残念ながら教育（者）はこの変貌の方向へと強力に推進する役割を果たすことになります。

学習（学ぶ）者ありきの教育、文字にすれば、より一層、こんな当たり前なことが困難とされる大きな状況は異常と言わざるを得ません。しかし、この異常は、絶望という形でそして、一人ひとりを、蝕んでいきます。高い理想を掲げれば掲げるほどに、この絶望は濃くなるという怖さがあります。

そんなとき、蝕まれた自身に絶望するだけではなく、「みんな」とのつながりをより強く回復することで、自身を取り戻していくことが重要です。そして、誰かが自身を取り戻す姿が、また別の誰かが自身を取り戻す力となります。

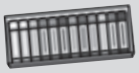
人と向き合う、血の通った教育を取り戻すにはまず、自身が人と向き合えるように復活しなければ始まりません。自分の言葉、自分の教育の考えを紡ぐという本質を手放してはなりません。復活の方向性はわかりやすく定めて、そこへ向かってじっくりと取り組んでいくことは、教育（者）の十八番ではないでしょうか。上を見ればキリがありません。いま、自分がどこを目指しているのか、「みんな」で考え合ってみませんか？

（東北生活文化大学短期大学部）

子育て、孫育て奮闘記

遊ちゃん、葉ちゃん便り（最終回）

阿部真弓



阿部真弓さんは、宮城で小学校教員を勤め、大塩小で定年退職後、大阪で暮らしている娘さんの子育てを支えるために大阪に移住。

障がいを持った孫育ての中で、宮城と大阪の教育環境の違いや教育の在り方などを考えます。

また、臨時休校！

「今度の日曜日は七色公園でクラス遊びをするんだ。楽しみだな。」

3学期が始まり、遊び係になった遊ちゃんは、さっそく友達と遊ぶ計画を立てたようだ。オミクロン株の感染爆発の真っただ中、大丈夫かなと心配したが、担任の先生に許可をもらっているという。日曜日は、一日中思いっきり遊んだ。そして、来週も計画するんだと楽しみにしていたが、次の日、学校で陽性者が出た。臨時休業の連絡。その後、数回臨時休業が続いた。結局、係になって張り切っていた遊ちゃんだが、その後クラス遊びを計画することができなくなった。この頃、大阪の新規陽性者数は、5000人を超え、うなぎ上りに増えていた。児童、生徒数が1500名を超えている彩都の丘学園で陽性者が出ることは致し方ない。このままでは3学期はどうなることやらと心配していたが、臨時休業方針が変わったため、臨時休業の連絡も来なくなった。状況はさらに悪くなってきている（2月5日には15000人を超えた）のだが…。葉ちゃんが毎週楽しみにしていた放課後ディサービス、そのお休みも2か月がたとうとしている。

箕面市のICT活用教育

箕面市は「教育日本一」を掲げている。今年度の主要施策の中に3年生までの35人学級、オンライン学習の推進・支援があり、合わせて2億円近くの予算を計上。孫たちは3年生、全国に先駆けて35人学級の適用を受け、6学級となった（本来であれば5学級）。タブレット（リース）も全国に先駆けて、昨年度から配布されていた。

今年度になると、また新たにタブレットが配布された。4月に接続テスト。6月にはタブレットドリル、9月には学習支援ソフト「トモリンクス」が導入された。パスワードは同じだが、それぞれにIDがあり、はじめは何が何だかわからなかった。しかし、子どもは理解が早く、わからないときに頼りになるのは遊ちゃんである。

タブレットドリルには、小中学校の全学年を対象としたドリル（小学校4教科、中学校5教科）が入っており、どの学年の問題も自由に取り組める。家庭での取り組みは、オンラインで学校に伝えられるようになっているようだ。実際、学校でもたまに利用するようだが、家庭学習として課題となったのは数回しかない。

トモリンクスの導入は画期的であった。翌日の持ち物や宿題、学年通信や学校からの連絡も全てタブレット上に配信されるようになった。学校からのプリントはほとんどなくなった。トモリンクスは、コロナ禍の中でのオンライン授業に対応するために導入されたようだ。現在、孫たちのクラスでもコロナ感染を避けるためにオンライン授業を受けている子がいる。また、陽性や濃厚接触者になったとしても体調が良ければ、オンライン授業が受けられる。トモリンクスを通して登校できない子どもたちへの連絡やプリント配布・回収を行っている。トモリンクスでは、教員の労力削減もねらいとしているそうだが、果たしてどうなのかはわからない。

退職して3年、学校がICT機器を通して大きく変革しているのには驚かされる。しかし、子どもたちは教師、友人たちと直に触れあう中で成長していくものである。ICT機器が導入されても、人とのかかわりを一番に大切にする学校であってほしい。

葉ちゃんのこれから

葉ちゃんはこの3年間、友達や先生方に恵まれて大きく成長した。しかし、言葉の理解が十分でないため、学習には支障をきたしている。特に国語や社会は課題山積の状態。先日は、社会のテストがあるというので、市役所と箕面駅を見学しに連れていった。帰ってきてから写真を見て、建物の名前を教えた。葉ちゃんと接していると、「理解させること」の困難さをひしひしと感じ、現職時代の自分の至らなさを痛感するこの頃である。

葉ちゃんの将来のことを考えると、そろそろ専門教育を考えなければならない。今の学校生活に馴染んでいるが故、いつから聴覚支援学校へ通わせるのか、悩ましい。私の大阪暮らしもまだまだ続きそうである。

（大阪府箕面市在住）

おすすめ映画

『ユンヒへ』

監督・脚本／イム・デヒョン
2019年／韓国105分 シネスコ
日本公開／2022年1月

長住　康博

韓国の地方都市で高校生の娘と暮らすユンヒ（キム・ヒエ）と、日本の小樽で叔母と暮すジュン（中村優子）。過去に恋人同士であった2人は、今ではそれぞれの人生を歩んでいる。長い間、連絡を絶っていたふたり。ユンヒのもとにジュンからの手紙が届く。

「……あなたは私のことを忘れてしまったかも。もう20年も経ったから……。あなたと出会ったから私は自分がどんな人間なのかを知ることができたの。時々、韓国が恋しくなる。私たちが住んでいた町にも行ってみたいし、一緒に通った学校にも訪ねてみたい。韓国にいる母は元気にしているのか……そしてあなたがどう過ごしているのか、気になっています」ジュンは日韓にルーツを持つ女性だ。

手紙を盗み見てしまった娘セボム（キム・ソヘ）。自分の知らない母の姿をそこに見つけ、手紙の差出人である日本人女性に母を会わせる旅を企てる。協力者は同級生の男子。韓国語と日本語がひんぱんに交わされる韓国映画。2つの国はこんなに近いのだ。娘に強引に誘われるかたちで小樽へと旅立つユンヒ。車窓からの海岸線の冬景色で始まるこの映画は、小樽へと向かう「冬の旅」だった。

長いこと離れ離れになっていたふたりを結び付けたのが、ユンヒの娘セボムとジュンの叔母マサコ（木野花）。ジュンに想いを寄せるリョウコ（瀧内公美）。女性たちの連帯が美しい。小樽でしんしんと降り続く雪、雪かきのマサコが繰り返す「雪はいつ止むのかしら」のセリフが2人を覆い隠してきた時間の長さを思わせる。家族にも明かしていない秘密を抱えるふたりの20年越しの再会と過去を丁寧に描く。韓国と日本、隣り合う2つの国で生きるふたり。女性の困難や抑圧は似通っている。20年前に、一体何があったのか？　最後のユンヒからジュンへの手紙は韓国の現実を記す。その韓国で高卒の履歴書を書き再就職の面接に向かう母と見守る娘。母に笑顔がもどっている。

アジア最大の映画祭「釜山国際映画祭」でクィアカメリア賞を受賞した。写真は映画祭での主役の3人。

（高校教員）

読書のすすめ（第7回）

久保　健

『人新世の「資本論」』　斎藤幸平 著　集英社　2020年

「人新世」という耳慣れない語と「資本論」の組み合わせに目を惹かれて、駅の売店に山積みになっていた新書を手にし、新幹線の中で読みはじめて一気に読んでしまった。

「人新世」とは、「人間たちの活動の痕跡が地球の表面を覆いつくした」年代を意味している。これが（時間的スケールの大きな）地質学上の年代であり、近代以降の時代と社会を解き明かすのに適切な概念であるか否かについては批判もあるが、本書で「人新世」と特徴づけられている現代社会が、人間の資本主義的経済活動によって地球そのものが破壊される危機をはらんだ時代であることは確かであろう。

本書の前半の第1～3章では、その現代において、資本主義の矛盾が地域で、国で、さらには国境を越えてグローバルサウスなどの弱者にしわ寄せされる中で、気候変動をはじめとする地球規模の危機が進行しており、世界規模でのSDGsも、エコバックやハイブリッド車を使う私たちのささやかな善意に支えられた行動も、結局はこの危機に加担する「大衆のアヘン」となってしまうことが、具体的な事例を挙げて説明されている。

後半の第5～8章では、資本主義というシステムを維持し、経済成長を続けながらこの地球規模の危機を回避しようとする様々な試みでは、この地球規模の危機を回避することはできない。そのためには、資本主義を克服し、前近代社会以来のコモンを復権させた脱成長コミュニズムが必要であることが、いくつかの事例とともに主張されている。

そしてその間に置かれた第４章では、①この危機が資本主義に由来する理論的根拠と、②その克服のヒントとが、晩期マルクスの草稿からの引用を駆使して説明されている。そのうち①については、斎藤の前著『大洪水の前に－マルクスと惑星の物質代謝』（堀之内出版、2019）と合わせ読むとさらに深く理解することができる。また②は後半の５～８章に続いており、資本主義を維持したままではこの危機は回避できないことが納得できるが、では「どうやれば危機を回避（また資本主義を克服）でき、どんな次の社会をめざすのか」については、そうすんなりとは納得できず、慎重に考える必要があると感じた。

ともあれ、本書が提起している問題は、若者をはじめこれまで政治や経済に無関心であった多くの世代の注目を集めている。Think Globally Act Locally と言われる今、「センターつうしん」のすべての読者に、本書を手に取り、読み、大いに議論してほしい。

（センター研究部長）

子どもと学校

コロナ禍での喜怒哀楽

芳賀　郁雄

授業者として生徒の前に立つことはすごいこと

現在1年生の副担任ですが、2年生の理科を教えるねじれた担当になっています。1学年には理科の初任者がいて、1年生の指導は彼の担当です。私は週1時間程度1年生の授業に入り、初任者の授業の進め方をみて助言したり、取り組みの遅い生徒の支援に入ったりします。

4月、「何でいるの?」という素朴な疑問に丁寧に答えながら、理科室内をうろうろしました。給食もクラスに入って一緒に食べ、1学年の先生であることをアピールしました。しかし、黙食だけでは同じ釜の飯を食うほどに仲良くなれません。

今更ですが、担任であること、そして授業者であることは、生徒とよりよい関係を結ぶという点ですばらしいことだ、と感じました。

予備軍が14名!?

3月に小学校の担任と引き継ぎがありました。「完全不登校は2名。その他に心配な子がいる。合わせて14人不登校になるだろう」ということでした。

「1年間提出物を出さない」「トラブルが多い」「自分の気持ちが言えない」「父親を、あのクズという」などなど、何かしら課題を抱える子どもがたくさんいます。

最初の学年部会で、学年主任は次のような方針を示しました。

①できなくて当たり前、だから学校に通っているのだと思って対応したい。

②一つ一つの段階を着実に上がらせたい。小さなことをコツコツと。

授業が始まってすぐに学力面で厳しい状況にあることが分かりました。しかし、教科書を忘れても、宿題をやってこなくても、授業中や試験中にふらっとトイレに行っても、事情の確認をしてマナーを教えることに力を入れました。

今でも時間通りに行動できないところが見られますが、我慢して授業に参加しようとする様子が見られます。1年間提出物を出さないと申し送りされた女子はとてもよく頑張っています。どの生徒からも中学校から直したいという気持ちが伝わってきます。

「行きたくなる学校づくり」とは

4月から2年間、行きたくなる学校づくりの指定（町単位）を受けました。

学校の勉強が楽しい、友達がいて楽しいなど、どこに焦点を当てて取り組むか学年団で考えました。その結果、「みんなで何かするのが楽しい」と思えるようなレクを考えて、集団を高めようと決めました。

5月中旬、学級委員会の4人と1時間のレクを考えました。彼らからジュニアリーダーで学んだゲームを提案されました。ゲームの内容を文に起こし、A3版のプリントにしました。学年集会を開いて提案し、質疑応答して、決議します。快活なココナさんが鋭い質問を繰り返し、みんなが疑問に思う点が明らかになりました。さらに、ココナさんに引っ張られるように質問する人が出てきました。学年団はココナさんというリーダー候補を発見し、頼もしく感じました。

この後、2か月に1回のペースでレクを企画しようとしましたが、コロナ禍で予定がどんどん変わっていくことになります。

思い通りにいかない行事づくり

8月末、蔵王で野外活動を控えていました。7月に入って、実行委員4名と学級委員4名で、夜の活動時間のレクを考えました。キャンドルサービスとミニレク、未成年の主張で構成することにしました。この準備に、多くの有志を募って、企画への参加者を巻き込もうと策略を立てていました。

しかし、本番12日前、県内の感染者数が過去2番目との報道がありました。8月27日、萩生田文部科学相は閣議後会見で「（部活動や修学旅行について）安易に中止せず可能性模索を」と発言しました。しかし、学年・学校は増え続ける感染者数に不安を感じ、結局10月中旬に延期、日帰りで実施と決めました。

予定していた夜間のレクは実施できず、9月下旬に体育館でミニレクのみを実施しただ

けでした。野活本番は雨降りでしたが、寒さに負けず、ウォークラリーと焼き杉を楽しんできました。

その後も2か月に1回のスパンで学級レク、学年レクと実施しましたが、思い通りに準備できず、教師の手をかなり加えることになりました。

遊びは歓迎。でも指導ばかり……

ユウキが取り巻きと一緒に遊びを開発しました。ボクシングのように向かい合い、瞬時に相手のマスクをはずします。空き教室に入って楽しんでいましたが、ブームになる前にストップをかけました。

ニッチはタブレットで怪しい写真収集が趣味。朝の会に出ず、トイレの隅で仲間に披露しているところを先生が発見。タブレットの使い方を全体で再確認することになりました。

トモキは誰かにかまってほしくて仕方がありません。入学後、授業中の居眠りが多く、周囲の信頼が得られません。そのくせ、小柄な体を走っている生徒にぶつけたりするので、逆襲されて痛い思いをします。ある時、トモキはユウキたちともつながりたいと近づいていきました。しかし、ユウキはグループの会話に入ってくるトモキを遠ざけようと暴言をはきます。そしてすぐに「今のはネタだから気にすんな」と変なフォローをしました。これが彼らの新しい遊びに発展。最初のうち、トモキは楽しんで接触を試みますが、くり返される暴言と「ネタだから」が不愉快になり担任に相談することにしました。両者への指導を通して事態は終息しました。

トラブルの度に指導・説諭しても、生徒たちの関係性が改善したわけではないので、形を変えて問題は表出してきました。

12月中旬、トモキ・ニッチガラス破損事件が起きました。学年主任はとうとう「明日朝、学年集会をしたい」と提案しました。相談の結果、強く叱っても響かないだろうから、冷静に、学びになるように話をしよう、ということになりました。

翌日、主任だけが講話し「この学年のスローガンは一歩です。一度立ち止まって、正しい判断をしませんか（一＋止＝正）」と訴えました。

行事のレクだけではなく、クラスでできる取り組みを提案すればよかったなと今更ながら反省しています。

状況を見ながら彼らの出番を（三送会）

2月いっぱい部活動が禁止になりました。そして、3年生を送る会が入試後に延期になりました。

生徒会担当は生徒の出番をつくろうと「対面」にこだわっています。2月末の職員会議で、「3年生は体育館のフロアに待機し、ステージには各部活動が1つずつ入場して演技やメッセージを披露する」ことが再提案されました。

コロナ感染者数が、前の週の同じ曜日を更新している状況なので、万が一のために動画も製作中です。しかし、試験期間や職員会議のために十分な活動時間が保障されません。心の中では「動画だけでいきましょう」と言いたいのですが、安易に中止せず可能性を模索している担当者を応援したい気持ちがありました。

三送会は、一昨年は中止、昨年は動画を流しました。行事が中止になったことで、手で触れることのできないものは記憶から消えていくようです。三送会のステージ発表に限って言えば、卒業した生徒たちが伝えてきた出し物の内容の豊かさ、演技のテンポ、呼びかけの工夫、野球部伝統の応援といったものが消えてしまいました。

しかし、今日も生徒たちは集まって形にしようと頑張っています。新たな伝統づくりのためにも三送会を対面で実現できることを期待しています。

最後に

出張等で不在の担任の代わりに帰りの会に行くのが楽しみです。相変わらず、時間にルーズだったり、取り組みが遅かったりするのですが、私の昔話をしっかりと聞いてくれます。

話題を振れば、聞いて聞いてと男子がしゃべり、女子が楽しそうに聞いています。楽しい学校はクラスのおしゃべりから、だと感じます。

コロナ禍はいつか終わるはず。生徒たちの喜怒哀楽に共感しつつ、あと1か月頑張りたいと思います。（現在、不登校は2名）。

（県南・中学校）

わたしの出会った先生 35

心に刻んだ一言

横山 頼義

中学3年の時に弁論大会があり、私は中学1年の時の出来事をもとに「心に刻んだ一言」という弁論文を書きました。

中学1年の私は、自分勝手で人の苦労などには目もくれぬ気ままな少年でした。そんなある日、生徒会の役員選挙が行われ、学級の代表として選ばれ立候補者になりました。そもそもやる気のなかった私の選挙演説は今思い出しても恥ずかしいほど適当で散々なものでした。ところが、選挙で生徒会書記に選ばれてしまったのです。生徒会役員になれば文化祭等の行事の時には遅くまで仕事をすることが分かっていたし、何より飼っていたレース鳩の世話がおろそかになることを一番心配していました。そこで、役員を辞退したいと申し出たところ……。以下は、弁論文からの抜粋です。

――ところが、断るといった矢先、生徒会担当の先生に宿直室に呼ばれたのです。「なぜ、生徒会の役員になるのがいやなんだ」と、問われたぼくは、帰宅してからやりたいことがいろいろあることを、役員を辞退したい一心から、うそを交えながら答えたのが思い出されます。「自分のことはするが、人のための仕事をするのはいやなんだな」先生は、ぼくの考え方を見抜いたような、深くしずんだ目で、たんたんと言ったのです。あの場面は、今でもぼくのまぶたに焼き付いています。あの一言は、人に奉仕することの大切さ、努力や苦労の尊さ、そして、自分本位・自分のためだけということのおろかさ、すべてを言い尽くした一言だと、ぼくは考えています。現在のぼくは、この一言に深く感謝しています。なぜなら、この一言は、自分の考えを直すための道しるべとなり、心に刻み込まれたからです。――

この弁論文に登場する「生徒会担当の先生」とは、三浦良平先生です。私は1、2年の時、技術家庭科を担当していただき、野球部の顧問・監督としてもご指導いただきました。思春期でやんちゃ盛りの私たちにしっかりと向き合い、指導してくださった恩師です。残念ながら3年の時には転出しており、私がこの弁論文を書いたことは知らなかったと思います。

三浦先生は、1992年3月に槻木中学校で卒業式の最中に倒れ、帰らぬ人となりました。私はその当時、初任2年目で河北町（現石巻市）に下宿していました。右も左も分からぬまま、組合の先生方に支えられながら、やっと教員を続けているという状態でした。組合の情報として「三浦良平先生」「公務災害」というフレーズは聞こえてきて気にはなっていたものの、タイミングを逃したというか、この件に係わることがないままに時は過ぎてしまいました。

今回、「宮城県教職員組合史」で調べ、三浦先生が「最後まで組合員として生きた」ことや「教職員の過労死で公務災害の認定申請を出したのは、宮城県で初めてのケースだった」こと、「4年に及ぶ公務災害認定闘争は全面的に勝利した」ということを知りました。どうして当時、もっと積極的に支援活動に係わらなかったのかという自責の念に駆られます。同時に、三浦先生が恩師だったことに誇りを感じます。組合史には、当時の基金支部は弁明書で「持ち帰り仕事は校長が命令したものではない。夜中までの仕事も特別負担なものではない。進路指導、学年主任の仕事、学年PTAの仕事などすべて所定の業務であって、過労の対象とはならない」と回答したとも記されていました。今では信じられないことです。このような時代に、教員の多忙・過労について当局の考え方を変えさせ、今につながる礎を築いた三浦先生の公務災害認定闘争。奇しくも宮教組書記長になった今、三浦良平先生に恩返しする意味でも「働き方改革」に全力で取り組まなければと思います。

（宮城県教職員組合書記長）

相談センター報告
（第26回）

肩の力を抜いて向き合う

みやぎ教育相談センター相談員　室賀　徹

定年退職して半年後、ボウリングを始めることにした。健康の維持・増進目的というより、今の自分がどこまでレベルアップできるものか、何かに挑戦してみたい気持ちの方が強かった。現在、週に2～3回、1回5ゲーム（1時間半ほど）投げに通っている。かつてブームだった頃とは様相が違い、ボウリング場の数は減り、場内は閑散としている。年上らしきシニア層が大半を占める。

私のボールの重さは14ポンド（約5・8kg）。このボールで18m先の10本のピンを倒す競技である。1番ピンと右斜め後ろにある3番ピンの間（ポケット）に3度から6度の角度で入射できれば大体はストライクになるとされている。ピンは1本1・5kg（直径12cm、高さ40cm）と重いのでスピードと角度がなければすぐボールは横へとはじかれてしまう。レーンには手前3分の2（約12m）のところまでオイルが塗られているため、ボールに横回転をかければレーン奥までは空回りで滑っていき、奥で急激に曲がり始め最適な入射角が得られるという仕組みである。レーンは幅2・5cmの細長い板が横に39枚張り合わされている。投球位置でのねらいが1枚ずれるとピンの位置では約7cmずれることになる。

当初は若かった頃の感覚で力任せに投げ、案の定、コントロールが定まらないどころか、肩が悲鳴を上げた。右肩が上がらなくなり、一時期、整形外科でリハビリを受けることになってしまった（笑）。考えてみれば5・8kgのボールを腕の力でなんとかしようとするのが間違いである。指南書を見ても、YouTubeを見ても「力めば力むほどスピード、回転、コントロールとも威力は半減。肩・腕の脱力がすべて。ボールの威力は重力と腕の振り子運動に任せ、腕の力は一切使わない」とある。実践するとまさに目から鱗であった。5回、6回とストライクが続くことがたまにあるが、振り返るとこういうときは概してスコアなど見ず（気にせず）、無欲で楽に投球できていたように思う。「ここでストライクがほしい！」と思うと、てきめんコントロールが乱れる。無意識のうちに肩・腕に力が入りスイングの軌道が狂うのである。ここがボウリングにおけるメンタルの難しさだ。

教育相談センターの相談業務に携わることになって1年が過ぎた。相談者の皆さんはとても真摯に生きている方々だなと実感している。年齢も家庭環境も一人ひとり様々であるが、自分なりの主張が実にしっかりしていて明確である。話の内容は正論で、納得でき、こちらが感服させられ聞き入ってしまうことがしばしばである。一方、その真摯さ、ひたむきさが故に周囲との軋轢や孤独感に陥ってしまうケースもあるように感じている。みなさん自分自身をとても冷静に、客観的に見ている。そして、自分のどこを変えればうまくいくかもしっかり認識されている方が大半である。でもなかなか変えられないジレンマがある。となれば、個性を受け入れない周囲（社会）の寛容さ不足が問われる。日本社会の持つ頑なさと力みが個人を孤立・孤独に追い込んでいるように思う。

楽天的でかなりいい加減な性格の私自身にできることは未だに暗中模索である。力まず、できるだけ肩の力を抜くことを忘れずにお話を聞いていきたいと思う。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022―272―4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき10時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間，休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

ひと言

他国を侵略する権利はどこの国にもない

佐藤　春治（センター運営委員）

2月24日、ロシアはウクライナに軍事侵攻しました。これは、世界最多の核弾頭保有国であるロシアが軍事力により侵略する行為で、国連憲章や国際法を無視した蛮行というしかありません。ロシアは国連安保理の常任理事国で、世界の平和に大きな責任を負う国の一つです。その国が自国の都合だけで、全面戦争につながりかねない軍事力を行使したことに対し、多くの国々から非難を浴びるのは当然のことです。

この先、ウクライナ、ロシア両国の和平に向けた話し合いが進展するためには、ウクライナの主権や領土保全が尊重され、ウクライナ国民の安全が保持され続けることが必要です。他国民の自決権を侵害する行為は、どの国であっても許されるものではありません。

日本は戦争放棄を謳う憲法9条を持ち、世界で唯一の被爆国です。その日本の政府は、武力の行使によって確固たる平和は築けないことや今こそ核兵器は使用も保有も断念し、廃棄することが地球上の全生物を破滅から救う道であると世界に強く主張すべきです。そのためにも、日本政府が核兵器禁止条約の批准に踏み出すことが求められています。

子どもの風景「作品について」……堀籠　智加枝（宮城作文の会）

「ガーン」と思ったら、詩を書こう

うちの給食は、手作りで愛情がこもっていてとってもおいしいのです。その中でも「揚げパン」は人気のメニューです。調理員さんたちが一つ一つをさっくりと揚げて、きな粉をまぶしてくれる、年に1回出るかどうかのレアメニューです。そんな日に、出張が入ってしまい「明日、あげぱんなのに、先生かわいそう」と、なぐさめられていました。そこへ「明日、おれ、先生の分のあげぱんおかわりするんだ。楽しみ！　おれ、じゃんけんで勝って絶対ゲットする！」と、目尻を下げてにこにこしている海くんがいたのでした。

その海くんが、翌々日「先生、昨日あげぱん食べられなかったんですよ」と、とても落ち込んだ顔で報告してくれました。そして、でき上がった作品です。

後日、お便りで紹介しみんなで読み合いました。経緯も時間も共有しているみんなが読むので、大爆笑。その後、感想で「私も食べたかったから、食べられなくて悔しい気持ちが分かる」「海くんは、本当に楽しみにしていたんだ」「あげぱんがすごく好きなのが分かる」と共感するものや、「ガーンが、おもしろい」と、海くんらしさが伝わると話す子どもたちもいました。

センターの動き

コロナ禍第6波　1月9日～3月21日
まん延防止等重点措置

〈1月〉
9日　民教連・冬の学習会
　「GIGAスクール問題学習会」43名参加
14日　第11回事務局会議「つうしん」次号計画「新年度の課題」
　①GIGAスクール問題
　②不登校問題
17日　ゼミナールSirube
18日　こくご講座世話人会「読み取りと文法」コロナのため2月に延期
28日　第12回事務局会議（中止）
29日　午前『教育』を読む会（中止）
　「研究年報」の打合わせ
　不登校支援団体・茶話会

〈2月〉
1日　こくご講座世話人会（中止）
2日　臨床教育学会・上田氏ら4名来訪
　被災地聞き取り調査のため
13日　道徳と教育を考える会（中止）
19日　こくご講座「読み取りと文法」講師
　斎藤章夫さん（4月以降に延期）
21日　ゼミナールSirube（中止）
25日　第12回事務局会議
　①震災高校生調査問題
　②読者会員の動向確認
　③現場の「研究員」制度について
26日　午前　研究部会「研究年報」の内容検討
　午後　第8回「震災のつどい」（オンライン併用）

〈3月〉
2日　河北新報に所長の「持論時論」掲載
8日　センターとして「ウクライナ問題の声明」発表
14日　「不登校問題」学習会
19日　午前『教育』を読む会
　午後　研究部会「研究年報」の内容検討
25日　第13回事務局会議「つうしん」106号発送

編集後記

ウクライナ戦争で、子ども、女性、老人の犠牲が連日報道。心が痛む。「第3次世界大戦」「核兵器使用」の有り得ない発言が飛び出している。同封されているセンターの「声明」をロシア大使館に送った。

2年ぶりの民教連冬の学習会が開催。体育分科会に集った先生方が今の学校、教職員が抱える課題、悩みを語った。「授業のマニュアル化の進行、どうやって授業を作ればいいかわからない」「忙しい、何かに追われている、通り一遍の授業しかできない」「多忙感が拭えない。夜遅くまで残っている」「病休者、不登校児の増大」「スタンダード、GIGA、校内研のやらされ感」「子どもについて語り合うことができない（みんな子どものことを考えているのに）」「子どもたちが繋がれない（GIGA、マスクなど）」「やること、やりたいことの乖離」最後に「子どもの成長につながる学び多い授業がしたい」。

現在の学校教育の中で「生きづらさ」を感じる子どもと保護者、教職員、新学期が始まります。どう考え、実践を創造していくか、そのヒントが本号には確かにあります。（達）

発行：(一財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター　2022・3・25　発行責任者：高橋達郎
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45 フォレスト仙台4F　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026
http://mkbkc.forestsendai.jp E-mail mkbkc@forestsendai.jp　印刷 株式会社きた出版